

表3 ハンタウイルスのHI抗原作成法

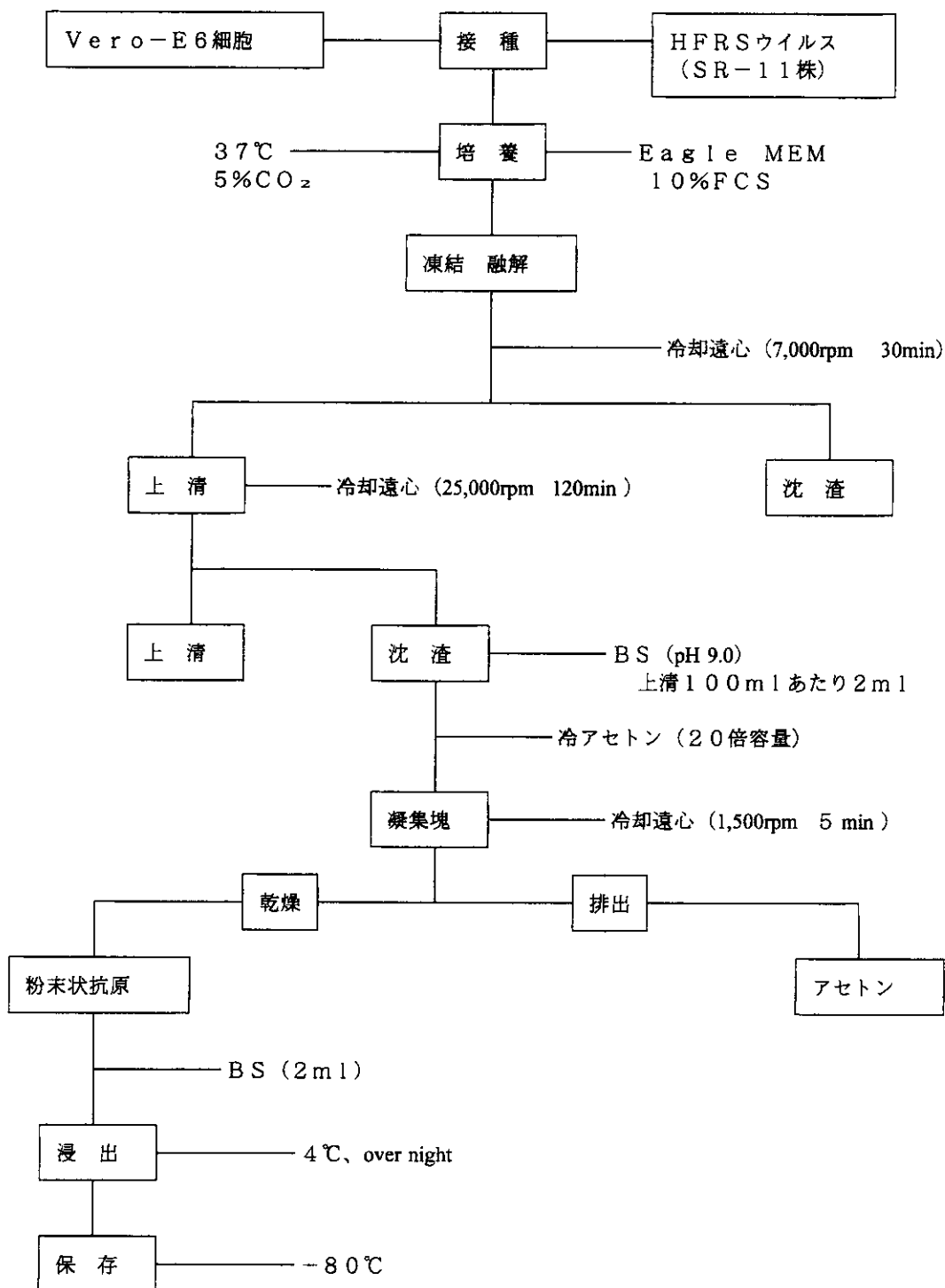


表4 積込地域別コンテナ数

積込地 \ 開梱地	大阪港	神戸港	関西空港	計
中国	20 (71.4)	12 (57.1)	49 (62.0)	81 (63.2)
その他のアジア州	8 (28.6)	5 (23.8)	4 (5.1)	17 (13.3)
アフリカ州	0	2 (9.5)	2 (2.5)	4 (3.1)
南アメリカ州	0	1 (4.8)	1 (1.3)	2 (1.6)
ヨーロッパ州	0	1 (4.8)	23 (29.1)	24 (18.8)
計	28 (100)	21 (100)	79 (100)	128 (100)

() : パーセント比率

表5 積込地域別貨物品目

積込地域	貨物品目	細品目	大阪港	神戸港	関西空港
中国	A 農水産品	a 魚介類			(1) 15
		b 肉類			(1) 3
		c 穀類豆類		7	
		d 野菜類		3	(1) 1
		e その他 (茶、その他の食品)			(1) 2
		f 綿花			
	B 鉱産品			1	
	C 金属機械工業品		2	1	(2) 9
	D 化学工業品 (プラスチック製品)		(2) 2		
	E 軽工業品 (製造食品、繊維製品)		1		1
F 雑工業品 (衣料品、雑誌、ガラス製品など)		(4) 18		(5) 17	
G その他				6	
その他のアジア州	A 農水産品	d 野菜類			(1) 4
		f 綿花		2	
	C 金属機械工業品		(5) 5		(1) 1
	D 化学工業品 (プラスチック製品、ポリエステル、薬品)		(4) 4		
	E 軽工業品 (繊維製品、製造食品)		(1) 1	3	
F 雑工業品		(6) 6			
アフリカ州	A 農水産品	f 綿花		2	
	G その他 (熱帯魚)				2
南アメリカ州	A 農水産品	a 魚介類			1
		f 綿花		1	
ヨーロッパ州	A 農水産品	a 魚介類			4
		d 野菜類			2
		e その他 (ポプリ、その他の食品)			(1) 2
	B 鉱産品 (貴金属)				1
	C 金属機械工業品				(3) 9
	D 化学工業品 (医薬品)				1
	E 軽工業品 (繊維製品、製造食品)				(2) 3
F 雑工業品 (衣料品、雑誌)				(1) 5	
G その他 (熱帯魚)			1	(3) 3	
計			39	21	92

() : 混載貨物品目の再掲

表6 貨物品目別に見たベクターの採集されたコンテナ数

積込地域	貨物品目	細品目	大阪港	神戸港	関西空港
中国	A農水産品	a 魚介類			(15) 4
		b 肉類			(3)
		c 穀類豆類		(7) 1	
		d 野菜類		(3) 1	(1) 1
		e その他 (茶、その他の食品)			(2)
		f 綿花			
	B 鉱産品			(1) 1	
	C 金属機械工業品		(2)	(1)	(9) 1
	D 化学工業品 (プラスチック製品)		(2)		
	E 軽工業品 (製造食品、繊維製品)		(1)		(1)
F 雑工業品 (衣料品、雑誌、ガラス製品など)		(17)		(17) 2	
G その他				(6)	
その他のアジア州	A農水産品	d 野菜類			(4) 3
		f 綿花		(2) 1	
	C 金属機械工業品		(5) 1		(1)
	D 化学工業品 (プラスチック製品、ポリエステル、薬品)		(4) 1		
	E 軽工業品 (繊維製品、製造食品)		(1)	(3) 1	
	F 雑工業品		(5) 2		
アフリカ州	A農水産品	f 綿花		(2)	
	G その他 (熱帯魚)				(2)
南アメリカ州	A農水産品	a 魚介類			(1) 1
		f 綿花		(1)	
ヨーロッパ州	A農水産品	a 魚介類			(4) 1
		d 野菜類			(2)
		e その他 (ポプリ、その他の食品)			(2) 2
	B 鉱産品 (貴金属)				(1)
	C 金属機械工業品				(9) 1
	D 化学工業品 (医薬品)				(1) 1
	E 軽工業品 (繊維製品、製造食品)				(3) 1
	F 雑工業品 (衣料品、雑誌)				(5)
G その他 (熱帯魚)			(1)	(3) 2	
計			* 2	* 5	* 16

* 何らかの虫が採集されたコンテナ数 () 書きは混載を含むコンテナ数

表7 採集した昆虫等の種類

発見した港	積込地域	コンテナ貨物品目	採集種	採集個体数
大阪港 (2コンテナ4種11個体)	その他のアジア州	家具・プラスチック製品	コムキモドキムクゲキスイの一種 ハナカメムシ科子ビクロハナカメムシ	1
		工具・ボタン類	ユウレイグモ科オダカユウレイグモ コガネグモ科イエオニグモ	6 3
		黒大豆 庭石	ハエトリグモ科の一種 クロバエ科の一種	1 2
神戸港 (3コンテナ5種8個体)	中国	野菜	ヤドリダニ科の一種 ヒザグモ属の一種	1 2
		トマトペースト 綿花	Corgnetidae科の甲虫 ヒザグモ属の一種 甲虫目の一種	2 1
神戸港 (2コンテナ2種2個体)	その他のアジア州	うなぎ・野菜	チョウバエ科の一種 ヒメヨコバイ科の一種 ユスリカ科の一種	1 1 1
		赤貝	チョウバエ科の一種	1
		機械部品	チョウバエ科の一種	1
		うなぎ	チョウバエ科の一種	1
		衣類	キノコバエ上科の一種	1
		うなぎ	ネツタイイエカ	2
		衣類	ヒョウホンムシ科ニセセマルヒョウホンムシ	* 1
		マッシュルーム	コイタダニ科サカモリコイタダニ	1
		マッシュルーム	トビムシモドキ科の一種 トビムシモドキ科の一種	1 7
		マッシュルーム	キノコバエ上科の一種の幼虫 ハネカクシ科の一種 ユスリカ科の一種	* 7 1 1
関西空港 (3コンテナ5種21個体)	その他のアジア州	マッシュルーム	キノコバエ上科の一種の幼虫	* 3
		サーモン	クロバエ科の一種	1
		食料品・雑貨 チョコレート	クロバネキノコバエ科の一種 ワラジムシ目の一種	1 2
関西空港 (5コンテナ5種6個体)	ヨーロッパ州	サーモン	ウンカ科の一種	1
		医薬品	アリ科の一種	1
		工具・カーペット・雑貨	甲虫目の一種	* 1
計		25コンテナ	23種	47個体

*印 生きたまま捕獲

参考資料：採集された昆虫等の特徴

1 ムクゲキスイ

乾燥動植物質及び加工品を加害。

2 チビクロハナカメムシ

アブラムシを捕食する。無害。

3 オダカユウレイグモ

屋内性のクモで近年日本に侵入定着した種とされている。無害。

4 イエオニグモ

やや屋内性のクモ。無害。

5 ハエトリグモ科

徘徊性で跳躍力に富み、ハエなどの小型の飛翔昆虫を捕食する。無害。

6 クロバエ科

糞食性のものが多く、消化器系感染症を媒介する。

7 ヤドリダニ科

大多数のものは自由生活性で、捕食性、腐食性、動物寄生性の種も多い。ヤドリダニ科が属する中気門類には下記のように重要な衛生害虫も含まれる。

イエダニ（発疹性リケッチャ、皮ふ炎）

トリサシダニ（セントルイス脳炎、西部馬脳炎）

ワクモ（リケッチャ痘瘡）

8 ヒザグモ属

9 Cognetiidae科の甲虫

10 チョウバエ科

幼虫がヒトの泌尿生殖器、消化器、気道、眼瞼内などに進入してハエ症を引き起こすことが知られている。食品工場では製造工程に成虫や幼虫が混入する事故が起こりやすい。

11 ヒメヨコバイ科

12 ユスリカ

気管支喘息や鼻炎の原因となった例が報告されている。

13 ネットアイエカ

フィラリア症を媒介する。

14 キノコバエ

幼虫がキノコに寄生する。

15 サカモリコイタダニ

体長0.33mm～0.37mm褐色

最初プリンスメロン畑などから発見され、果物に汚斑点をつくる原因虫と考えられた。その後、人為的影響の強い環境の土壌に広く生息することがわかった。

16 トビムシモドキ科

冬から春にかけ増加し、活動の好適温度は 17℃以下、低温では-4℃~-5℃でも活動している。夏は湿った土壌で休眠し、10 月中旬頃から地表に現れ、植物の幼芽や根、その他の有機物を食う。小麦の幼芽に密集し加害する。

17 ハネカクシ科

樹皮や朽木や茸などにいる。

18 クロバネキノコバエ

農作物の被害。不快害虫。油槽などの有機肥料を施した植木鉢に発生。

19 ワラジムシ目

20 ウンカ科

食品工場での製造工程で成虫の混入事件が起きている。

*ユウレイグモ、ハエトリグモ類が採集されたことは、えさとなる昆虫などの存在を示している。

表8

1998年7月と10月に石垣島で採集された蚊と生息水域

	生 息 水 域			
	広陽地帯	山脚及び森林地帯		
	人 雨 水 口 水 容 溜 器 樹 田	人 雨 水 口 水 容 溜 器 樹 田	樹 地 表 洞 水 流	溪 蟹 穴 (淡 水)
ハマダラカ属 <i>Anopheles</i> コガタハマダラカ <i>An.minimus</i> シナハマダラ <i>An.sinensis</i>	○	○	○ ○	○ ○
ナガハシカ属 <i>Tripteroides</i> ヤエヤマキンパラナガハシカ <i>Tr.bambusa yaeyamae</i>			○	
チビカ属 <i>Uranotaenia</i> オキナワチビカ <i>Ur.annandalei</i> マクファレンチビカ <i>Ur.macfarlanei</i> シロオビカニアナチビカ ハラグロカニアナチビカ	○		○ ○ ○	○ ○ ○ ○
ヤブカ属 ヒトスジシマカ リバーシマカ	○	○ ○	○ ○	○
オオクロヤブカ属 オオクロヤブカ		○		
イエカ属 コガタクロウスカ オキナワクロウスカ クロツノフサカ ハラオビツノフサカ フトシマツノフサカ カニアナツノフサカ カラツイエカ コガタアカイエカ <i>Cx.vishnui</i>	○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○：著者による採集

表9

水田で採集された幼虫の採集比率

地区名	採集された幼虫の数				
	全数	<i>An.sinensis</i>	<i>Ur.ohamai</i>	<i>Cx.vishnui</i>	<i>Cx.tritaeni.</i>
崎枝(4)流域	0	0	0	0	0
名倉川流域	19	2 (11%)	1 (5%)	14 (73%)	2 (11%)
通路川流域	12	1 (8%)	0	11 (92%)	0

Cx.tritaeni. : *Cx.tritaeniorhynchus*

図2. 石垣島におけるコガタハマダラカ(*An. minimus*)の幼虫の分布

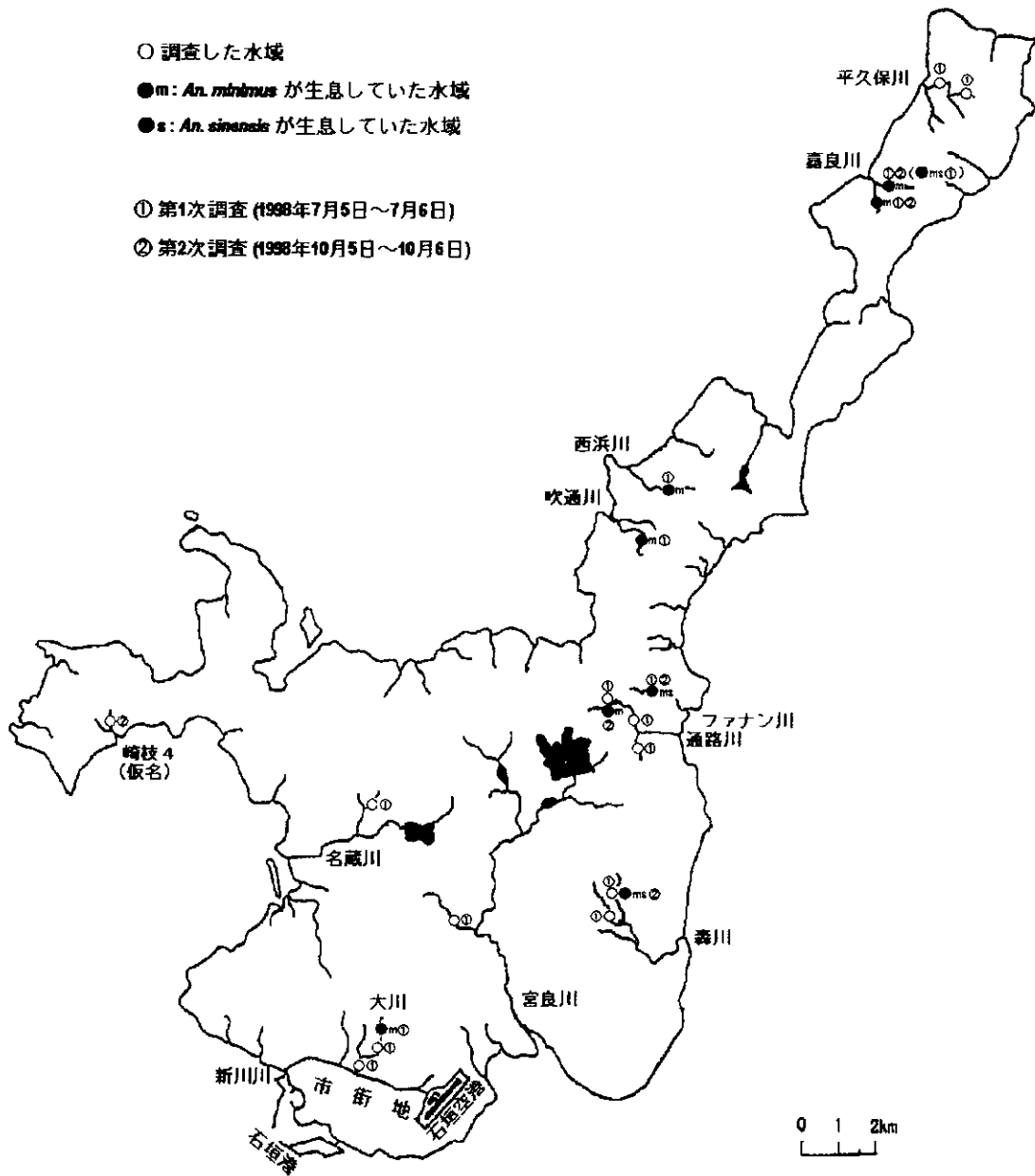


表10 石垣島に生息するコガタハマダラカの生息密度

川の名称	調査次	調査地点数	調査場所数	捕獲場所数	捕獲率(%)	平均捕獲数	その他の蚊
宮良川	①	1	5	0	0	0	
	②	1	3	0	0	0	
轟川	①	2	10	0	0	0	
	②	1	5	2	40	2.6	As, Ci, Cc
通路川	①	3	13	0	0	0	Um, Ci, Cb
	②	1	5	2	40	1.0	Ua, Ci
ファンン川	①	1	15	6	40	1.8	Ci, Co
	②	1	5	2	40	0.6	
嘉良川	①	2	14	7	50	2.4	As, Co, Ci
	②	2	10	7	70	2.0	Uo, Uy, Ci
平久保川	①	1	5	0	0	0	
西浜川	①	1	5	2	40	1.4	
吹通川	①	1	6	1	17	0.5	Ch
崎枝4(仮名)	②	1	2	0	0	0	
名蔵川	①	1	2	0	0	0	
大川	①	3	11	1	9	0.2	Ch

①第1次調査

②第2次調査

As; *Anopheles sinensis* シナハマダラカ

Ua; *Uranotaenia annandalei* オキナワチビカ

Um; *Uranotaenia macfarlanei* マクファレンチビカ

Uo; *Uranotaenia ohamai* シロオビカニアナチビカ

Uy; *Uranotaenia yaeyamai* ハラグロカニアナチビカ

Ch; *Culex hayashii* コガタクロウスカ

Co; *Culex okinawae* オキナワクロウスカ

Cc; *Culex cinctellus* ハラオビツノフサカ

Ci; *Culex infantulus* フトシマツノフサカ

Cb; *Culex bitaeniorhynchus* カラツイエカ

表11

H F R S 抗体検査 (検査所分)

	依頼人数	検体数	回収率	調査票のみ
○検査所	3	1	33 %	2
N検査所	6	5	83 %	1
T検査所	3	2	67 %	
Y検査所	4	4	100 %	
N検査所	2	2	100 %	
N検査所	9	7	78 %	
○検査所	1	1	100 %	
K検査所	7	7	100 %	
K検査所	15	14	93 %	
H検査所	6	5	83 %	1
F検査所	12	7	58 %	1
N検査所	3	3	100 %	
合計	71	58	82 %	5

表12 そ族の捕獲・調査に従事した期間
 名古屋・神戸・福岡検疫所（平成元年から10年間）

期 間	人 数
1年未満	14 (22%)
1～2年	18 (29%)
2～3年	6 (10%)
3～4年	11 (17%)
4～5年	7 (11%)
5～6年	2 (3%)
6～7年	4 (6%)
7年以上	1 (2%)
計	63

表13 職員の健康調査

(HFRSウイルスに暴露された可能性のある職員)

質問項目	回答数	なし	あり
原因不明の数日以上続く発熱	63	63	0
尿蛋白陽性	63	63	0
血尿・尿潜血反応陽性	63	62	1
腎機能障害	63	63	0

表 1 4 検疫所職員におけるHFRSV抗体保有状況

対 象	検査数	陽性数	陽性率 (%)	間接蛍光抗体法による抗体価		
				≤ 1:16	1:32	≥ 1:64
検疫所職員	58	0	0	58	0	0

H F R S V 抗体の再検査 (I F A)

表 1 5 - 1

検査実施年	実施人数	陽性 (× 16 以上)
1 9 8 2 年	9	4

* I F A は定法により実施したとのことであるが抗体価の詳細は不明である。

表 1 5 - 2

検査実施年	実施人数	陽性 (× 32 以上)
1 9 9 9 年	3	0

* 8 2 年に陽性を疑われた者のうち 3 名について I F A を実施した。

平成10年成田空港における輸入動物流通実態調査

成田空港検疫所

分担研究者 鈴木 大輔（成田空港検疫所長）

研究協力者 阿部 幸秀（食品監視課）、松本 泰治（検疫課）

岩崎 恵美子（現 仙台検疫所長）

東島 弘明（現 横浜輸入食品中央情報管理官）

はじめに

近年、エイズ、エボラ出血熱等の新興感染症や、これまでに制圧したと考えられてきたマラリヤ、ペスト等の再興感染症が世界的に問題となってきた。これらの多くは動物及び媒介動物に由来する動物由来感染症に分類されるものである。現在、わが国にはペットをはじめ実験用に供されるものまで多種類の動物が輸入されている。

輸入動物に関する法律としては現在、狂犬病予防法、家畜伝染病予防法、動物の保護及び管理に関する法律「絶滅の恐れのある野生動物の種の国際取引に関する条約」（いわゆるワシントン条約）並びに「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下、「感染症予防法」、平成10年10月）がある。感染症予防法及び狂犬病予防法で、家畜伝染病に基づく動物以外の輸入動物に対し動物由来感染症に関する必要な規制が出来るようになってきている。また、輸入動物の規制は、サルに対しては感染症予防法に基づき動物検疫所が対応することになっているが、今後、輸入動物を介し社会に大きな影響を与える輸入感染症が発生する事も想定されているにもかかわらず、動物の輸入実態や、その病原体保有状況は明らかではない。このような現状から、輸入動物及び媒介動物に由来する動物由来感染症の防疫対策を行うためには、輸入動物種・輸入数・輸出国・原産国・繁殖育成の有無・輸入動物の流通経路・健康証明書の有無等の調査を行い、実態を把握することが必要不可欠である。

そこで動物由来感染症対策に関する基礎資料を得る目的で、成田空港を經由して輸入される動物について成田空港検疫所で流通実態調査を行った。

1. 調査目的

関係行政機関、輸入関係業者、航空会社等に協力要請を行い、輸入動物に由来する感染症対策に必要な基礎資料を得ることを目的に輸入動物の流通実態調査を実施した。

この調査ではどのような動物が輸入されているかを中心に実施した。

2. 調査対象動物

調査対象動物は、動物検疫所の指定検疫物の動物及び魚介類を除く次の動物（以下、「輸入動物」という）とした。

- (1) ネズミ、リス等の齧歯類
- (2) サル等の霊長類
- (3) その他のほ乳類
- (4) 鳥類（鶏、七面鳥、ウズラ、アヒルの家禽（指定検疫物）を除く）
- (5) は虫類等

3. 調査方法

- (1) 全日本動物輸入者協議会会員の輸入者については、「輸入動物流通等実態調査票」（別紙-1）の提出依頼。
- (2) その他の輸入者及び個人輸入者については、関係行政機関の協力により窓口にて「輸入動物流通等実態調査票」提出箱を置き調査票の提出を依頼。

4. 調査票の内容

(1) 輸入動物流通等実態調査票の内容

- ① 輸入年月日
- ② 輸入者名及び所在地
- ③ 航空機便名
- ④ B/L 番号 (Airway bil 又は House B/L)
- ⑤ 輸入動物種・輸入匹数及び羽数
- ⑥ 輸入目的
- ⑦ 輸出国
- ⑧ 原産国
- ⑨ 輸出国・原産国での飼育方法
- ⑩ 輸出国政府発行の健康証明書 (輸入動物の健康状態に関する輸出国政府発行の検疫証明書や獣医師の健康診断の証明書などの添付書類をいう。従ってその証明内容の信頼性については点検確認していない。)の有無
- ⑪ 到着時の健康状態

5. 輸入動物流通実態調査票による平成10年の調査結果

調査結果のとりまとめにおいては、動物の輸入件数 (貨物1ロットを1件とする) で整理すると少量の航空貨物が多いことから量的には無視できるようなことがクローズアップされるおそれがあるために社会的な影響を勘案し、輸入調査匹数で整理した。

なお、本調査に協力いただいた輸入業者数は44社であった。

調査結果は、次のとおりである。

(1) 輸入動物種及び輸入調査匹数 (表-1~6)

平成10年輸入動物流通等実態調査による輸入動物調査総匹数は、528,487匹であった。このうち、輸入動物の種類別の調査結果は次のとおりである。

- ① 齧歯類は、総数 230,578 匹であった。このうち、マウス・ラットは 12,184 匹 (5.3%)、リスは 29,671 匹 (12.9%)、プレリドックは 4,225 匹 (1.8%)、ハムスター・チンチラ等その他 184,495 匹 (80.0%) であった。
- ② 霊長類は、総数 947 匹であった。このうちサルは 944 匹 (99.7%)、オウマキは 3 匹 (0.3%) であった。
なお、税関貿易統計 (成田空港) 抜粋による平成10年におけるサル類の輸入実績は、4037 匹であった。(表-11)
- ③ その他のほ乳類は、総数 4,696 匹であった。このうちフェレットは 3,465 匹 (73.8%)、クビシは 85 匹 (1.8%)、キツネは 8 匹 (0.2%)、その他 1,143 匹 (24.3%) であった。
- ④ 鳥類は、総数 62,232 羽であった。このうち、インコは 12,760 羽 (20.5%)、オウムは 211 羽 (0.3%)、九官鳥は 240 羽 (0.4%)、フィンチは 43,691 羽 (70.2%)、その他 5,330 羽 (8.6%) であった。
- ⑤ は虫類は、総数 230,034 匹であった。このうちトカゲは 13,028 匹 (5.8%)、ヘビは 2,585 匹 (1.1%)、ワニは 725 匹 (0.3%)、カメは 209,480 匹 (91.1%)、その他 4,216 匹 (1.8%) であった。

(2) 輸入動物種別主要輸出国 (表-7)

輸入動物の種類別・主要輸出国別の調査結果は次のとおりである。

- ① 齧歯類について主要輸出国でみると総数 230,578 匹中、オランダが 157,052 匹 (68.1%) で最も多く、次いで中国の 25,773 匹 (11.2%)、米国の 15,018 匹 (6.5%)、チェコの 6,750 匹 (2.9%) 等の順であった。
- ② 霊長類について主要輸出国でみると総数 947 匹中、スリナム (南米) が 355 匹 (37.5%)、中国が 160 匹 (16.9%)、ガイアナ (南米) が 136 匹 (14.4%)、カメルーン (アフリカ) が 70 匹 (7.4%)、フィリピンが 40 匹 (4.2%) 等の順であった。

- ③ その他のほ乳類について主要輸出国でみると総数 4,696 匹中、米国が 2,570 匹 (54.7 %) で最も多く、次いでオランダの 1,100 匹 (23.4 %)、ニュージーランドの 549 匹 (11.7 %) 等の順であった。
- ④ 鳥類について主要な輸出国でみると、総数 62,232 羽中、中国が 23,146 羽 (37.2 %) で最も多く、次いでオランダの 11,836 羽 (19.0 %)、台湾の 11,665 羽 (18.7 %)、パキスタンの 7,400 羽 (11.9 %) 等の順であった。
- ⑤ は虫類について主要な輸出国でみると、総数 230,034 匹中、米国が 208,413 匹 (90.6 %) で最も多く、次いでコロンビアの 2,111 匹 (0.9 %)、インドネシアの 1,585 匹 (0.7 %)、エルサルバドルの 1,175 匹 (0.5 %) 等の順番であった。

(3) その他、アフリカの主な国からの輸入状況 (表-8)

- ① タンザニアは鳥類 6 羽、
- ② 南アフリカは鳥類 3 羽、霊長類 12 匹、
- ③ モザンビークはは虫類 50 匹、
- ④ ベニンのは虫類 369 匹、
- ⑤ ザンビアはは虫類 2 匹、
- ⑥ エジプトは齧歯類 148 匹、
- ⑦ カメルーンは鳥類 20 羽、霊長類 70 匹、は虫類 332 匹が輸入された。

(4) 輸出国における飼育方法別輸入状況 (表-9)

輸入動物調査総匹数 528,487 匹のうち、繁殖育成が 429,838 匹 (81.3 %)、野生捕獲が 67,623 匹 (12.8 %)、その他・不明が 31,026 匹 (5.9 %) であった。これを動物種類別にみると次のようになる

- ① 齧歯類は、総数 230,578 匹中、繁殖育成が 190,401 匹 (82.5 %)、野生捕獲が 30,064 匹 (13.0 %)、その他・不明が 10,113 匹 (4.4 %) であった。
- ② 霊長類は、総数 947 匹中、繁殖育成が 345 匹 (36.4 %)、野生捕獲が 588 匹 (62.1 %)、その他・不明が 14 匹 (1.5 %) であった。
- ③ その他のほ乳類は、総数 4,696 匹中、繁殖育成が 4,220 匹 (89.9 %)、野生捕獲が 323 匹 (6.9 %)、その他・不明が 153 匹 (3.3 %) であった。
- ⑤ 鳥類は、総数 62,232 羽中、繁殖育成が 27,561 羽 (44.3 %)、野生捕獲が 29,637 羽 (47.6 %)、その他・不明が 5,034 羽 (8.1 %) であった。
- ⑥ は虫類は、総数 230,034 匹中、繁殖育成が 207,311 匹 (90.1 %)、野生捕獲が 7,011 匹 (3.0 %)、その他・不明が 15,712 匹 (6.8 %) であった。

(5) 輸出国における輸入目的別輸入状況 (表-10)

輸入動物調査総匹数 528,487 匹のうち、販売 (ペット) 用 (以下「ペット用」ともいう) が 505,268 匹 (95.6 %)、実験用が 18,152 匹 (3.4 %)、動物園用が 177 匹 (0.1 %)、その他・不明が 4,890 匹 (0.9 %) であった。これを動物種類別にみると次のようになる

- ① 齧歯類は、総数 230,578 匹中、ペット用が 212,540 匹 (92.2 %)、実験用が 14,963 匹 (6.5 %)、その他・不明が 3,075 匹 (1.3 %) であった。
- ② 霊長類は、総数 947 匹中、ペット用が 588 匹 (62.1 %)、実験用が 345 匹 (36.4 %)、動物園用が 8 匹 (0.8%)、その他・不明が 6 匹 (0.6 %) であった。
- ③ その他のほ乳類は、総数 4,696 匹中、ペット用が 3,070 匹 (65.4 %)、実験用が 1,546 匹 (32.9 %)、動物園用が 9 匹 (0.2%)、その他・不明が 71 匹 (1.5 %) であった。
- ④ 鳥類は、総数 62,232 羽中、ペット用が 59,494 羽 (95.6 %)、実験用が 1,298 羽 (47.6 %)、動物園用が 160 羽 (0.3%)、その他・不明が 1,280 羽 (2.1%) であった。
- ⑤ は虫類は、総数 230,034 匹中、ペット用が 229,576 匹 (99.8 %)、その他・不明が 458 匹 (0.2 %) であった。

(6) 輸出国別、輸入目的別の健康証明書添付状況 (表-9、10)

輸入動物における輸出国政府発行等の公的な健康証明書 (信頼性の程度は問わない) の添付状況をみると、輸入動物調査総匹数 528,487 匹中、健康証明書を添付したものの